

## I・イリイチの学校・教育分析再考

### －②「コンヴィヴィアリティ」と「道具」を中心に－

古市将樹

要旨：本稿は、前稿（副題：①脱学校論を中心に）に続き、イリイチの学校・教育分析を再考するものであり、教育や学校がどのような世界の中でおこなわれていると彼が考えていたのかをまとめている。その時、「コンヴィヴィアルティ」と「道具」というふたつのキーワードに注目し、イリイチがそれらによって表そうとしている世界の見方を分析した。そこには、共生のための互いの節度が保たれる状況と、特定の人間による過度に操作的になっている状況がある。そこでここでは、それらのバランスの問題、さらには、後者の状況において教育が目的とも方法ともされる状況を分析している。そして、イリイチからすれば、過度に操作的な環境における教育は、具体的には、「教育」という言葉が用いられながら、その実質は「教授」になっている教育なのであった。

キーワード：コンヴィヴィアリティ，道具，教育と教授

承前

#### 1. 脱学校論その後

既述のように、脱学校論のインパクトは大きく、賛否両論を引き起こした。一躍注目を集めるようになったイリイチは、主に活動していた南北アメリカにとどまらず、各国でのさまざまなシンポジウムや討論会に招かれた。ただし脱学校論が、社会の分断、心理的不能感、環境破壊など、人々にネガティブな効果を及ぼす近代産業化社会の特徴を抽出するパラダイムとしての学校を論じたはずだったが、その学校・教育批判の部分に注目が集まり、シンポジウムなどでもそれらに関する議論が多くを占めた。ところがそしてイリイチは、そのような場で議論がかみ合わない経験をし、学校や教育の賛否を論ずる以前に、議論を成り立たせる土台が共有されていないことに気がつく。というのも、当時のイリイチからすれば教育は、たとえば、

私は、われわれが「教育」と呼んでいるものはキリスト教の伝統なしには考えられないと思う。恩恵を授ける儀式についてのカトリックの教義、その教義の知識を背景としなければ教育は歴史的に説明できない。人間の墮落した本性は社会の儀式的介在を通してあがなわれなくてはならない、という神学的な基盤をぬきにしては、教育は想像もつかない<sup>(1)</sup>。

という、「墮落した本性」同様に、知的・能力的・精神的・身体的に未熟・未発達な状態にある人間観にもとづいてこそ成立しているものだったからである。このような人間の状態は、将来の成長や発達の可能性をもちながらの、現状としての未熟や未発達と解釈することができるかもしれない。しかしながら、もしそうであれば、なにをもってそのように判断できるのか。さらに、そのような人々に、なぜ、誰が、どのように判断して、教育が必

要といえるのか。イリイチはさらに次のようにも語っていた。

すべての人間は原罪を持って生まれてきた、という教義が、すべての人間は原愚を持って生まれ、その原愚は公的に組織化された制度的なとり扱いを通してのみあがなわれる、という教義に変わってきた。このような背景に照らさなければ、私には、「教育」が説明できない(2)。

罪は贖われなくてはならない。それは教会に依って可能になると救済が制度化されている。そして人々は全員生まれもって罪を背負っているのであるから、全員が教会へ精勤するのは当然のことである。このような構図は、「原愚」を背負って生まれてきた人々と学校や教育の関係にも当てはまるのであった。

ところが、イリイチのこのような教育観には異論が出た。それを要約すれば、教育はそのような側面ばかりではなく、可能性を広げ人間性を豊かにする行為でもあるということだった。この展開は、前稿で触れた「逆生産性」をめぐる議論の対立を思い起こさせるが、事態はそこにとどまらない。というのも、そもそも同じ「教育」という言葉を用いながらも、対話に齟齬が生じている。ここにおいてイリイチは、次の発言にまで至ったのである。

「教育すること」や「教育」といった言葉は、あまりにも泥まみれにされ、水増しされてしまったために、いったん会話に入り込んでくると、ありとあらゆることを意味するようになっている。[中略] その言葉を、より適切に、歴史的な意味で使うように主張したい(3)。

それでは、当時のイリイチにとって、「教育」とはどのような意味の言葉だったのだろうか。彼は、

教育は、学校において生産され、パッケージされた連続した教授的諸行為 [instructions] の形をとった、学校において将来の人生のためのプログラムされた準備になり得る(4)。

と記している。すなわち、育てる・育むなどの意味を含む全般的な教えるの「教育」という言葉を用いながらも、その内容は、特定の知識や技術を教える「教授」になっているというのである。なぜ彼はそのように考えるのか。

## 2. コンヴィヴィアリティと道具

「教育」が「教授」としておこなわれているという指摘がなされたのは、1973年に発表された、*Tools for Conviviality* (邦題『コンヴィヴィアリティのための道具』)においてであった。同書にはイリイチの基礎的な世界観が示されている。その特徴を一言でいえば、バランスが崩れた世界の指摘と、バランスが崩れる分水嶺 (watershed) を明らかにしようとしていることとできるであろう。

まず、タイトルにも使用されている「コンヴィヴィアリティ」(conviviality)であるが、英語のこれは一般的に「陽気さ」や「宴会」を意味する。彼は、この言葉を用いる理由を以下のように説明している。

ひじょうに現代的で、しかも産業に支配されていない未来の社会を明確に説明するには、自然な規模と限界を認識することが必要だろう。その限界の中でのみ機械が奴隷に取って代わることができて、それを超えてしまうと機械は奴隷たちを新たな農奴制に導

く、ということをお互に認めるようにならなければならない。教育が人々を人工的な環境に適応させることができるのは、この限界内においてのみのものである。それらの限界を超えたところに、全世界の校舎、病棟、監獄がある。政治が、エネルギーと情報のどちらかでも公平なインプットに対してというよりはむしろ、最大の産業的アウトプットの配分に対して関わるのが当然とみなされるのも、この限界内のことにすぎない。いったんこのような限界〔の存在〕が認識されると、人々と道具と新しい関係性の三者の関係を明瞭にすることが可能になる。現代的なテクノロジーが、それを管理する人々に対してよりもむしろ、政治的に相互関係にある諸個人の役に立つ、そのような社会のことを、私は“コンヴィヴィアル〔な社会〕”と呼ぶことにする。〔中略〕私は、道具に責任をもって限界が定められた現代社会を示すための術語として“コンヴィヴィアル”を選んだ(5)。

奴隷を労働から解放するはずだった機械が、ある限界を超えると、新たな農奴制の中における奴隷を生み出すという比喻は、脱学校論のときに指摘された制度化の問題の構図に対応している(6)。そして特に教育に関しては、限界を超えたところに「校舎」が位置するとされている。すなわち、新たな農奴制に相当する制度として学校教育制度が考えられている。それでは、そのような限界があるとしても、その基準はなんだろうか。また、なぜ「コンヴィヴィアル」がそれを示す術語たりえるのだろうか。さらに文中にある「道具」とはなんだろうか。

英語の「コンヴィヴィアル」は先のような意味であるが、正確には、イリイチが採用したのは、スペイン語の *eutrapelia* だった。これには、「陽気さ」だけではなく、それを過剰にしない自らの「節度」の意味が加わっている。そしてこれは、かつてアリストテレス (Aristotle) やトマス・アキナス (Thomas Aquinas) においては、人々の人格的な結びつきを損ねることになる楽しみに対する節度として語られていたように、倫理的な意味をもつ言葉だった。

さらに、後に来日したイリイチは、「コンヴィヴィアル」について尋ねられ、次のようにも語っていた。

私は、ボールベアリングのように、すばらしく近代的であって、しかも、過去に知られていたものをこえて、しかし、社会的な差異を増大させないものを、ある社会のために命名するその名を見つけざるを得ませんでした。そして、スペイン語でいう「コンビビエンシアリダード (convivencialidad)」こそがその命名に最もふさわしいと思ったのです。それは、「一緒に生活するアート」という意味です。ですから、私が使う用語、コンビビエンシアリダードは、中央集権化やヒエラルキーや搾取を必ずおしつける近代技術を、極力排除する社会のための用語です。この意味で、産業主義 (industrialism) にコンビビアリティを、あるいは産業的道具にコンビビアルな道具というものを対置させているわけです(7)。

ここでイリイチは「コンビビエンシアリダード」としているが、これもまた「陽気」を意味する言葉である。そして、「一緒に生活するアート」と語っている部分について、これは翻訳された資料であるため定かではないが、「アート」が *art* の場合、それは「術」「手段」「方法」などを意味し、「コンビビエンシアリダード」は、「陽気」という状態だけではなく「方法」を意味していると解釈できる。さらに、これが、「中央集権化やヒエラルキーや

搾取を必ずおしつける近代技術」に対抗的に置かれているということは、イリイチは、そのようなおしつけの技術によって規定されるのではない、諸個人の共生的に生きる方法をここで語ろうとしているといえるであろう。

それでは、もひとつのキーワードである「道具」(tool)とは何か。イリイチは、それを、ドリル、注射器、箒、建築の材料、モーターなどのハードウェア、自動車や発電装置などの機械はもちろん、広く触知し得るものの生産施設、さらには、教育、健康、知識、意志決定など触知し得ないものの生産システムも含むとしている。それらの共通点は、合理的に設計された考案物ということであり、そのすべてをひとつのカテゴリーに収めることで、基本的な食料や器具 (implement) など、既存の文化において合理化の必要があるとは思われていないものから区別するためであった。これら二者のうち、tool は一般的に扱うのにある程度特別な技術を要する道具を意味し、implement は主に手作業に用いられ特別な技術を必要としない器具を意味する。それら道具と器具のちがいは、後者の使用主体が基本的に直接的なその使用者だけであるのに対して、前者には、直接的な使用者の以前に、それを「合理的」に「設計」した者がおり、道具の使用にはその者によって既に決められた使い方の制約があることだろう。

*Tools for Conviviality* 発表の当時にはまだほとんど普及していなかったが、現在の道具としては、ちょうどパソコンが相当する。パソコンは、どのソフトを使用するかという選択肢は使用者にある。また、文書作成、表計算、作画など、使用方法の自由が確保されているようにもみえる。しかしその自由は、使用者以外の者によって合理的に設計されている中でのことであるし、そもそもソフトを動かす OS からしてそうである。さらに、インターネットの使用自体は自由度が高いが、それもアクセスしてのことという前提がある。要するに、われわれはパソコンでかなり自由な作業ができるが、それは様々な条件・制約の内での可能なことであり、パソコンは使用者以外による操作的な道具となっている。しかもたとえば仕事上メールのやりとりは当たり前となっていて、パソコンは、あれば便利というよりも、なくてはならないものになっている。もちろん、メールを使わないという選択肢もあるであろうが、周りが全員使っている場合、使わないことによる差し障りがかなり大きいことが想像できる。さらに、実際には、使わなかった場合、存外なんとかなるのかもしれないが、その不利益の想像が容易であること自体が、使わないという選択をむずかしくする。

このように考えると、われわれはさまざまな道具に囲まれ、それらを使用・利用しているが、そのかなりのものが操作的な道具であり、操作的な環境の中でわれわれは生きていくといえるであろう。そして操作的な道具は、たとえばインターネットがそうであるように、人々の交流を容易にするものであったとしても、それは利用できる者の間のことに限られる。また、データの共有が可能なのは、共通のソフトを持っている場合に限られる。つまり、操作的な道具は、利用できる者とそうでない者に人々を分極化する。これでは、コンヴィヴィアルな道具、広く人々が「一緒に生活するアート」のための道具とはいえないであろう。

以上のようなコンヴィヴィアリティと道具の説明からすると、イリイチは、操作的な道具を批判し、それらのない世界を理想としているように感じるかもしれないが、そうではない。松谷邦英が、

社会全体において操作性の強い制度をすべて廃絶し、コンヴィヴィアルな制度のみを実現しなければならないとする主張ではない。最大の問題は、社会の諸制度がスペクトルの右〔操作的制度〕に集中する結果、社会全体が過剰に制度化され、貧困の近代化と環境破壊が進行することにある。そこで、社会全体の道具編制を、スペクトルの左に位置するコンヴィヴィアリティの方向線において再構築することが必須とされているのである。このように見てくるならば、イリイチの主張が、産業や科学技術の全否定を掲げる反産業主義とも、産業社会のラディカルな転覆を志向する「革命」の伝統とも一線を画すものであることは明らかであろう(8)。

と記しているように、コンヴィヴィアリティは、道具編制の「再構築」のための指標であり、同時に、それによって彼は、世界の現状についてひとつの見方を提示しているのだった。道具はすべて、常に必然的にコンヴィヴィアルな道具なのかもしれないが、操作的なそれなのかが決まっているのではないが、現在は、操作的なそれが支配的になっているというのであった。そしてこれは教育にもいえることで、それは教授的諸行為に「なり得る」可能性をもっているのであった。

### 3. コンヴィヴィアリティと教育

先に引用したように、イリイチは、教育も合理的に設計された「道具」のひとつとしていた。この見地からすれば、教育も操作的道具となるわけだが、それが、教育ならぬ教授である。ただし、教育はそれにとどまらない。

教育の発明は、私がいわんとすることの一例である。われわれは、教育が現在の意味を獲得したのはほんの最近のことであることを忘れがちである。〔初期のしつけを除けば〕教育は宗教改革以前には知られていなかった。教育は、若者に必要とされる教授〔instruction〕や、ある者が後の人生で従事しそのために教師が必要とされるような研究とは明確に区別されていた(9)。

イリイチは、教育がその内実を教授とし、さらに教授として研究されるようになっている、これを「教育の発明」と呼んでいる。それでは、その発明はいつのことだったのか。

彼は、歴史上、教育の発明の具体例を、世界初の絵入り教科書『世界図絵』や万人に知識を教える方法を考案した『大教授学』を著し、近代教育学の父とも称されるコメニウス(Johannes Amos Comenius)にみている。イリイチは、コメニウスがおこなったことを次のようにまとめていた。

すべての人を、継続的な啓蒙の段階をなんとか乗り越らせようとする試みは、中世末期の偉大な技芸である、錬金術に深く根ざしている。17世紀のモラヴィア派司教であり、自称汎知主義者であり教育者であったヨハン・アモス・コメニウスは、現代の学校の創始者のひとりとして正当に見なされている。彼は、7もしくは12学年からなる義務的な学習を提案した最初の人の中の一人だった。『大教授学』の中で、彼は学校を「あらゆる人にあらゆることを教える」ための装置として語り、知識の流れ作業的生産のための青写真を概説した。それによると、コメニウスの方法通りにおこなえば、教育はより安価でよりすぐれたものになり、すべての人を、なし得る十全の人間性をもつように成長させるはずであった。しかしコメニウスは、大量生産についての初期の理論家であっただけではなく、自分のわざ〔craft〕に関する技術的用語を、子どもたちを育てるわざ〔art〕

を述べるのに適合させた錬金術師でもあった。この錬金術師は、12段階の連続的な啓蒙を通じてその精神を等級づけて、劣位の要素を精錬しようと努めた。その目的は、劣位の要素自体と全世界の利益のために、劣位の要素が金に変わることであった。もちろん錬金術師はたとえ何度試みても失敗した。しかし失敗するたびに彼らの「科学」が、失敗の新たな理由を産出し、彼らは再び〔錬金を〕試みたのである(10)。

ここでは教育を錬金術に、教師や教育学者を錬金術師に擬え、全体的にそれらのダブル・イメージで語られている。コメニウスの有名な言葉「あらゆる人にあらゆることを教える」が知識の流れ作業的大量生産と解釈できることについては多言を要しないだろう。だがそれ以上に、錬金によって金が生産されることに注目したい。錬金とは卑金属を精錬して貴金属である金を産出することであり、それに模して教育は、子どもたちのもつ劣位の要素を金に変える行為とされている。それでは、誰が、何をもって、子どもたちの劣位の要素を判断するのだろうか。同様に、何をもって価値のある金とするのだろうか。

現在でも、学校教育は、子どもたちの可能性、素質、才能などを、引き出す、開花させる行為であるというような言説をしばしばみかける。それによって子どもたちが金になることもあり得るだろう。しかしその時には、子どもたちが卑金属であるという前提があり、それが既述した「原愚」である。さらに、精錬はいつまでもおこなわれるのではなく、それに失敗した金属は廃棄され、新たな金属をもって精錬が始まる。これは就学年限のある学校教育においても然りのことであろう。教師にはそのような(廃棄)つもりがなくとも、ある期間内に教えること、換言すれば、教えることにタイムリミットが設けられ、当事者である教師以外の者によってそれが決定される。卒業生にまで在学中と同様な関わりを続けるのはむずかしいという点では、錬金術的な学校教育は、教師をも不自由にしているといえるだろう。

このような教育は、「劣位の要素〔子どもたち〕自体と全世界の利益」のためにおこなわれるとされる。それでは、目的がなぜそれら両者の「利益」となり得るのだろうか。ここに学校が関与している。

「教育」という名の商品と「学校」という名の制度は、お互いを必要なものと仕立て上げている。その循環は、制度が目的を定めるようになっている、という洞察を広く共有されることによってのみ打破され得る(11)。

もともとは、教育の実施や普及のために学校的な場所が考案されたのかもしれないが、イリイチからすれば、現在ではその関係は逆であり、学校制度が教育のあり方を規定している。それは教育の内容や形態だけのことではない。何かのために教育をうけるのではなく、(学校)教育をうけること自体が目的化している。ではなぜ諸個人は制度による規定を引き受けるのか。それは学習に関するコンヴィヴィアリティの減少に関係している。

学習のバランスは、ある社会における二種類の知識の割合によって決定される。第一の知識は、環境に対する人々の創造的な活動の成果であり、第二の知識は、[大規模に]作り上げられた環境[milieu]による人間の「平凡化」[trivialization]の結果を意味している。第一の種類知識は、人々の初歩的な関わり合いや、コンヴィヴィアルな道具の使用に由来する。他方、第二の種類知識は、人々がそれに従うよう、はっきりとした目的をもってプログラムされた訓練の結果として、彼らに生じるものである(12)。

第二の種類知識に関して、先の例をあてはめれば、卑金属に対して金を貴金属とみなす

こと自体が「平凡化」のひとつ、ものの見方の画一化であり、それは価値観の画一化ともいえる。これを制度が推し進め、その示準は操作方法を考案した専門家によって決定される。だが、イリイチは、二種類の知識の優劣や真偽を問題にしているのではない。第二の種類の知識の学習が大勢を占め、第一のその機会が減少していること。したがって、知識には二種類あること自体を知る機会が減少していること、それが問題である。

脱学校論では、学習することと教育されることの混同、教育を受けることと学校へ通うことの混同が指摘され、使用価値に対して交換価値が優勢な価値観となる、価値観の画一化（価値の制度化）が問題とされていた。だが、この時点では、分析・批判の対象が制度から拡大している。過度に操作的になった道具に囲まれた環境の中では、自分たちが経験したのとは別の教育、学校、学習などがあり得ることに気づく機会が減少している状況が指摘された。そしてここでは、諸個人の目的を達成するための方法として各自で選択し得る様々な学習や教育や制度があるのではなく、制度や専門家が設定した目的の達成のための方法としての教育、さらには方法であることを超えて、教育自体が目的化していることが指摘されているのである。

かつてイリイチは、自身が考える本来の・理想の教育について、

教育とは、諸個人に独自の人生観を成長させること、諸個人が人間の共同体の中に蓄積されている諸々の記憶へ接近すること、そして、その記憶の利用を増やしつつ協力しあって進んでいくという関係性を諸個人が持つこと、を意味している(13)。

とか、

まだ自分の気づいていないレベルに存在する人間の潜在力を諸個人に自覚させること、および、人間の生活をはぐくむべく諸個人に自己の創造力を活用させること、これらが教育のあるべき姿である(14)。

などと記していた。しかしイリイチは、このような教育観を前提としての研究・議論の展開をもちやこなわない。それは、様々な道具に囲まれた中で価値観や諸概念が形成されるのであるなら、自分自身の教育観についてもそのことは当てはまるからである。そこでイリイチは、教育の歴史性の研究へ向かい、特に、言葉をめぐる教育や学習の分析をおこなった。それはどのような研究だったのか。

(本稿つづく)

註

- (1) Ivan Illich, et al, “ Pilgrims of the Obvious,” *RISK*, vol.11 no.1, World council of Churches,1975, p.20.
- (2) Ibid., p.26
- (3) Ibid., p.44.
- (4) Ivan Illich, *Tools for Conviviality*, New York: Harper & Row, 1973, p.59.
- (5) Ibid., p. x x iv
- (6) イリイチは次の資料で制度について以下のように語っていた。

われわれは、われわれの世界観を、われわれの諸制度として具体化してきた。〔しかし〕今や、われわれの方が、それら諸制度の虜になってしまっている。

I・イリイチの学校・教育分析再考②「コンヴィヴィアリティ」と「道具」を中心にー

(Ivan Illich, “Outwitting the ‘Developed’ Countries,” *The New York Review of Books*, vol.XIII, no.8, November 6, 1969, p.20.)

- (7) フォーラム・人類の希望編『イリイチ日本で語る 人類の希望〈新版〉』新評社, 1984年, 27ページ。
- (8) 松谷邦英「イリイチ再考ーコンヴィヴィアルな社会の展望ー」『社会科学ジャーナル』50, 2003年, 54ページ。
- (9) *Tools for Conviviality*, p.18.
- (10) Ibid., pp.18~19.
- (11) Ibid., p.19.
- (12) Ibid., p.58.
- (13) Ivan Illich, “Commencement at the University of Puerto Rico,” *The New York Review of Books*, vol.XIII, no.6, October 9, 1969, p.15.
- (14) “Outwitting the ‘Developed’ Countries,” p.22.